

公共空間におけるアクティビズム、 そして資本に消費されない当事者性について

リリセ

本レポートは Farm-Lab Exhibiton 『「クィア」で「アジア人」であることとは?』の制作過程に参加した私の所感である。

今回テーマの根幹となっている「クィア」(Queer)は、LGBTQIA+のQの部分であり¹(*1)、男女二元論によらない性の在り方を提示する言葉である。自身もトランスジェンダーとして、フィリピンを拠点にアーティスト／アクティビストとして活動するセリーナ・マギリュー氏をディレクターとして、3人の俳優と演出助手、3人の通訳、2人のインターン、2人の制作が常に参加するという形で稽古は進められた。

セリーナのリーダーとしてのカリスマ性、俳優たちのそれぞれの魅力、通訳や演出助手の鋭い洞察力など、チームの素晴らしさについては、いくら褒めてもキリがなくなってしまうので、割愛しておこう。

~~~~~

先日、渋谷の松濤美術館で開催されている「装いの力—異性装の日本史」を見てきた。この展示は今回のパフォーマンス制作にあたって、現地稽古3日目に視察学習の時間が組み込まれていた。(私は参加できなかったため、遅れて見てきた次第である)

渋谷区は早い段階からダイバーシティ政策に踏み込み、2015年からパートナーシップ制度を導入している。またレインボーパレードの開催地にもなっている。その一方で、渋谷区はLGBTQIA+が市場価値に大きな影響力があることを利用して、“生産性”のある多様性のみを優遇し食い物にしているという批判もある。

私は、少し前から松濤美術館が渋谷駅前にデカデカと広告を出していることに驚いていた。松濤美術館は、基本的には古美術を扱う小さめの美術館なのだが、トレンド感のあるテーマのためか、いつもより若い女性の来場者が多い印象を受けた。

---

<sup>1</sup> 「Q」は「クィア」(Queer)に加え、「クエスチョニング」(Questioning)を指すものでもある。

展示の前半は奈良～室町時代の歴史風俗における異性装の記録や物語を、江戸/明治に描かれた絵で説明するというなんとも不可思議な展示であった。史実を追う展示でありながら、実際には中世の記録ではなく近代から過去への眼差しが展示されている。

眼差しは、幻想だ。その内面が描かれることはない。

描かれていた異性装は儀式のため、魔除けのため、敵を欺くため等、目的が外部化されているものが多く、本人の意思は分からない。一例として挙げられていた、女人禁制の寺社にて僧侶によって女装させられていた稚児たち（それは他者の欲望を反映されているのだろう）については、女の格好をして何の役割を持たせられていたかと思うとゾッとする。

そもそも性別を纏うとは、他者の欲望を具現化することなのかもしれない。ほとんどの洋服は、男はガタイ良く、女は華奢に、という風にデザインされている。誰に教わったわけでもなく、売り場に行けばそうデザインされているものが並べられており選択肢は限られている。かつて異性を纏うとは、刷り込まれた概念を利用したバグであった。

おそらく自分のために着飾る行為は、記録からは取りこぼされているだろう。

~~~~~

セリーナ曰く、フィリピンでは昔話は時代に合わせて形を変えて語り継がれていくという。ゆえに今回の制作は、日本の昔話を語り直す形をとっている。周囲の眼差しを受けて自由を失ったかぐや姫、そして花咲じいさんの物語の中で、他者の勝手な思い込みによって殺されてしまう犬のシロ。それを内面から語り直す試みだ。

そもそもかぐやが性別を持たない存在だったら？シロが言葉を持ち、誰かに自分の思いを伝えられたら？

3人の俳優による物語の読み替えは、それまで昔話の中では語られなかった登場人物の内面を通じて、一つの作品となって紡がれる。最終的にそれはスキャンダラスなものというより、かすかな声を拾う作品となったことがとても興味深い。

セリーナが元々発表していたコンセプトメッセージを読むと、社会への抵抗を謳う反逆精神に満ちたものを目指していたと思われる。そして実際セリーナの醸し出すパワフルな雰囲気から、きっと彼女自身がカリスマ的な力強いパフォーマンスをする能力があるのだと思う。

当時コンセプトを読んだ私も、そういう力強いパフォーマンスをどう日本で行うのかを楽しみにしていた。

彼女のインスタグラムで見たフィリピンの路上でのパフォーマンスは、かつての1960年代のハプニングを思わせたし、公共空間で行うということはそれくらいのインパクトや、ある種のキャッチーさがないと成り立たないのではと思った。

しかし結果的に、声なき声に着目することになったことは、私にとってかなりのインパクトがあった。

キャッチーなクィアカルチャーと言えば、最初に思い浮かべるのは、キャンプ的なファッションや振る舞いだろう。ドラッグクィーンはあえて過剰な眼差しを引き込むことで、奇異な存在から特別な存在へ自己を押し上げてきた人たちの文化であり、今も素晴らしいショーが上演され続けている。

そういったアプローチは力強く魅力的であるが、レインボー消費が進む社会で、色眼鏡を通して、自分とは別世界の人種としてエンタメ消費的に見てしまう人は多いだろうと思う。なぜなら規範を超越していく人は憧れの存在として幻想化されてしまうからだ。幻想化してしまうと、その内面は語られなくなってしまう。

~~~~~  
声なき声を聞くことは、少し前から日本で上演される演劇作品の傾向ではある。（弱い派然り、岡田利規の能を取り入れた演劇『未練の幽霊と怪物—「挫波」「敦賀」—』や、NODA・MAPの『フェイクスピア』もそんな話であった）

東京芸術劇場としては、そうなることは必然だったのかもしれない。しかし、当事者性に寄り添いながら、そこに閉鎖的な仲間意識のようなものがなく、開けていたように感じたのが新しかった。話し手と聞き手が物語の中で完結しているのではなく、聞き手が観客自身であったからかもしれない。登場人物の3人がそれぞれ舞台にひとりで立っていたことも効果的だったと思う。それによって、観客は自分もひとりの人間として向き合うことができただろう。

私は、アクティビストとしての自覚が芽生えたならば、自分のための居場所がない者たちは定期的に公共の場に出現しなくてはならないと思っている。なかったことにされないために、眼差しの中に飛び出すこと。それは全ての人に眠った声がある、と私が信じているから

だ。なかったことにしたつもりで生きてきた同志がこの世のどこかにいるかもしれない、と希望を抱くことが芸術だと私は思う。

公共空間で声を上げることの作用について考える。ロワー広場はよく声が響く空間で、姿が見えないはずの上の階のカフェテリアから、人が引き寄せられていた。ここで起きていたのは、眼差すことではなく、聞くことだったと思う。

~~~~~

公演を終えて、ひたすら考えるのは、私に何が語れるかということである。クィアネスについて、ノンバイナリーについて、私は全く当事者ではないから、何を言っても偏見がつきまとう。出来る限りジェンダースタディーズの勉強をしていくことにした。この問題について私が持つ知識があまりにも少ないことに自覚させられた。

セリーナが当初のコンセプトを保ちつつも、参加者の声を聞きながらアプローチを変えていったこと、展示見学や日本のLGBTQIA+事情に詳しい人を呼んでインタビューの時間を設けたコミュニケーションデザインチーム、テーマについて車座でディスカッションタイムを設けたことなど、当事者リサーチにおける様々なアプローチの方法を知れたことが、今後のクリエイションの態度を立て直すきっかけになったと思う。

そして公共空間におけるクリエイションも新しい発見が多かった。現地入りしてから、花を降らせていたら、自分もやってみたいと手を伸ばしていたおじいさんや子供。不意に立ち寄った通りすがりの人が作品にゆるりと巻き込まれている様は、作品全てを座って見させる以外で、断片的でもメッセージを与える緩やかな劇場的なコミュニケーションの在り方を提示していたように思う。

劇場における対話の可能性が広がった気がした。ぜひ機会があれば、様々な方法で東京芸術劇場の対話空間を出現させる試みをやってみたい。



リリセ

ー東京（日本）

ポーラは嘘をついた主宰。脚本・演出以外にも、
ヴィジュアルデザインやインスタレーションなども手がける。その他、レースを地面に敷いて、初対面の人々が気軽に議論するためのトークサロン”LacePicnic”を定期的を開催し、様々な対話の可能性を展開している。

Twitter : <https://twitter.com/toririse>

ウェブサイト : <https://paralyzedpaula.wixsite.com/paralyzedpaula/home>